

ウイルス学会関連研究集会紹介

1. 第1回新型コロナウイルス研究集会

佐藤 佳

東京大学医科学研究所 システムウイルス学分野 教授

「新型コロナウイルス研究集会」の立ち上げ

2023年6月8～9日を会期に、「第1回新型コロナウイルス研究集会」と銘打った、新型コロナウイルスに特化した研究集会を初めて立ち上げ、東京の渋谷QWSで開催した。集会のテーマは「パンデミック後の世界への道標」。蓋を開けると、ほぼ定員の172名の方々にご参加いただくことができた。

1会場で2日間、ぶっ通しで口頭発表と続けるスタイルで開催した。最終的に、一般演題が49題、うち若手からの発表をまとめた「優秀演題賞先行セッション」に11題が集まった。途中で協賛企業からの「フラッシュトーク」といういわゆる「広告枠」も6題募ることができた。さらに、企業ブースも設置し、そちらには7社からの展示をいただいた。そして、ランチョンセミナーを2題、イブニングセミナーも1題、企業協賛で開催することができた。このように、多数の企業様から協賛いただくことにより、会を円滑に進めることができた。この場をお借りして深く感謝を申し上げたい。この甲斐あって、3食つきで一般参加登録は7000円、学生参加登録は無料、という破格での開催が可能となった。さらに、初日の夜には無料で参加できる情報交換会も会場で開催することができ、広く交流する機会を作ることでもできた。

「特別講演」は3枠は用意し、ウイルス学の権威から河岡義裕先生（東京大学新世代感染症研究センター、他）に、最先端の免疫学の理解のために宮坂昌之先生（大阪大学免疫学フロンティア研究センター）にそれぞれお声がけし、

ご快諾いただいた。

残りの1枠は、「基礎研究に関する会」とは言え、それに留まるようにはならないような仕掛けが必要だと考えていた。そこで、コロナ禍で突きつけられた問いに深く切り込んだノンフィクション「知の統合は可能か(時事通信社)」を執筆された、作家の瀬名秀明さんをお願いし、こちらも快諾いただいた。

会は質問が絶えず飛び交う非常に白熱としたもので、会場で折々に会う参加者の方々に、「すごい熱気だね」というお言葉を多数いただいた。これはひとえに、こういう機会を待ち望んできた方がそれだけ多かったこと、そしてそれこそが、これからの本邦の新型コロナ研究の原動力となるものだと思われた。また、本研究集会の開催の様子については、基礎研究の集会としては異例だと思われるが、NHKや共同通信でも即日ニュースとして放送・配信いただき、基礎研究分野のみならず、一般からの関心の高さも感じられた。

会の様子を眺めている中で、心から「開催して良かった」と思えた瞬間があった。それは、初日の夜の情報交換会の際、「優秀演題賞先行セッション」で発表した大学院生どうしが集まり、それぞれの研究手法を紹介し合い、学び合っていた姿である。これまで3年以上続いたパンデミックによる活動制限・自粛のいちばんの煽りを受けたのが学生と言っても過言ではない。「青春ってすごく密なので」とは、2022年の夏の甲子園で初の白川越えを果たした仙台育英高校の須江監督の言葉であるが、オンラインでの学会参加の機会がなくなり、他の研究機関の同年代たちと交流し、いろいろなことを学ぶ機会が失われてしまった学生たちのダメージは計り知れない。このような場を作ることにより、若い学生同士が交流する機会を作れたこと、そして学生同士が活き活きと交流している様子を目にすることができたことは、主宰者として冥利に尽きるものであった。

これから～第2回集会の開催に向けて

WHO（世界保健機関）は、2023年5月5日に、COVID-19の「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」の宣言を終了した。時はほぼ同じくして、同年5月8日、日本政

連絡先

〒108-8639

東京都港区白金台4-6-1

東京大学医科学研究所 感染・免疫部門

システムウイルス学分野

Tel: 03-6409-2212

Fax: 03-6409-2213

E-mail: keisato@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

府はCOVID-19を感染症5類に移行した。つまり、新型コロナは世界から消えていないが、「コロナ禍」は終わりを迎えつつある。そして、コロナ禍の終わりは、公的資金による研究支援の終わりの始まりとも言える。最近、国内外の研究者と会った際、通り一遍の挨拶が終わった後に、どちらからともなく決まって口をつく質問がある－「いつまで新型コロナの研究を続けるつもり？」これには、研究資金の打ち止めによって研究を止めざるを得ない、パンデミックの終わりで話題性もなくなったので撤退など、いろいろな事情がある。そして、自身が元々専門としているウイルスの研究に回帰する・したい、という意味合いもある。私はまだしばらく新型コロナに関わる研究領域に身を置き、これからも研究を進めていきたいと考えている。

すこし話は反れるが、その理由についてすこし述べる。「パンデミックへの備え」が世界的にもっとも充実しているウイルスは、(高病原性鳥)インフルエンザウイルスである。インフルエンザの場合、頑健な研究体制・手法、国際連携の基盤がすでに構築されている。他方、コロナウイルス研究にそれらが欠けていたことは、今回の新型コロナパンデミックからも明らかである。しかしここで留意すべきは、今回のパンデミックが、コロナウイルスによる初めての感染症有事ではなかった、という点にある。21世紀に入り、SARS、MERSという国際的な感染症有事が2度も起きていたにも関わらず、これらの事態が、インフルエンザのような研究体制の整備に資さなかった、という事実には目を向けるべきであり、今後の教訓とすべきものであると考える。しかし上述のように、パンデミックの中で新型コロナ研究に奔走していた研究者たちが、パンデミック収束に伴う予算縮小の煽りを受けて、その研究を終了しようとしている、そしてそのような動向は、国内外で共通である、という事実がある。すなわち、これだけの惨事をもたらしたにもかかわらず、同じ轍を踏み、今回のパンデミックの教訓が次の「パンデミックへの備え」に活かされないことはきわめて憂慮すべき事態とであると言える。研究支援の終了に伴う研究者人口の減少は、それを助長するもの

である。

「パンデミックとたたかう」ために同じ方向を向いて奮闘した3年間の経験が無駄にしないためにも、そして、そこでせっかく芽吹いたものを無駄にしないためにも、2024年には、第2回研究集会を開催することを決めた。第2回集会のテーマは「COVID-19の疫学、臨床医学、免疫学、ウイルス学」。東京コンファレンスセンター・品川で、8月2～4日に開催する。新型コロナの基礎ウイルス学は第1回集会と変わらず、私たちG2P-Japanが担当する。それに加え、基礎免疫学は高橋宜聖先生(国立感染症研究所 治療薬・ワクチン開発研究センター)に、臨床医学は忽那賢志先生(大阪大学)に、そして、公衆衛生学は押谷仁先生(東北大学)にご担当いただくことになっている。高名なこれらの先生方にプログラム委員としてご参画いただくことで、「新型コロナのすべて」を対象とした研究集会として開催し、研究分野の底上げと、ますますの活性化を図りたいと思っている。

最後に、次のパンデミックに備えるためには、今回の経験値が絶対に必要である。次のパンデミックまで、ウイルス研究が下火にならないように、ウイルス学、感染症学を盛り上げていくために、それがこれからの私(たち)の使命だと思っている。

プロフィール

佐藤佳 (Kei Sato)

2010年、京都大学医学研究科博士課程修了(3年次早期修了)、医学博士。京都大学ウイルス研究所博士研究員、助教、講師などを経て、18年4月から東京大学医科学研究所感染症国際研究センター准教授(研究室主宰者)、22年4月から現職。杉浦奨励賞(15年、日本ウイルス学会)、文部科学大臣若手科学者賞(20年)、日本学術振興会賞(23年)などを受賞。2021年1月より、研究コンソーシアム「The Genotype to Phenotype Japan (G2P-Japan)」主宰。